【論　　文】

日本市民社会派マルクス主義の系譜とその理論的起源[1)]

盛　　福　　剛*

要　旨

日本市民社会派マルクス主義は 1960 年代に成立し，1970 年代末には次第に衰退したが，その独自の規範理論的性格は長く論争の対象となってきた。本稿は，日本市民社会派マルクス主義の第一世代にあたる高島善哉・内田義彦，第二世代にあたる平田清明・望月清司の理論的構成を手がかりとして，その成立の時代的背景，世代間継承関係，および理論的起源を明らかにするものである。「古典の新たな再建」は，市民社会派を講座派から区別する理論的特質である。市民社会派の理論的構成は，マルクスをスミスの理論と接合させ，スミスの市民社会論を基礎としながら，マルクスにおける個体的所有の再建などの思想を結びつけることによって，市民社会を観念論的な意味における近代文明社会へと還元し，さらに市民社会と社会主義との対話を試みた。しかしこの試みは，市民社会が階級社会として内包する支配と被支配の二重構造を捨象し，経済領域においては私的所有社会における生産関係と生産力の弁証法的矛盾を捨象するものであった。

Key words：日本マルクス主義，市民社会派，講座派，世代継承，理論的起源

一，はじめに

日本市民社会派マルクス主義は 1960 年代に成立し，1970 年代には次第に衰退した。その独自の規範理論的性格は，国内外の学界において長く論争の対象となってきた。ジョン・キーン（John Keane）は，日本市民社会派マルクス主義が短命に終わった理由を，その理論の内部に「市民社会によって市民社会を止揚しようとする夢」という論理的矛盾が含まれていた点に求めている[2)]。植村邦彦もまた，市民社会派の代表的論者である内田義彦が，1976 年の『国富論』刊行 200 周年記念講演以後，自らも創設に関わった市民社会論を積極的に評価することはなかったと指摘している。もう一人の代表的人物である平田清明も，1973～1974 年にヨーロッパでの生活を経験した後，理想化された西欧型市民社会への幻想から醒め，市民社会をブルジョア社会と同一視するようになった。そして，マルクスの社会革命理念が目指すものは市民社会ではなく，労働者の協同工場に基づく「アソシエーション」（Association）であると考えるに至り，市民社会派から「アソシエーショニ

＊　武漢大学哲学学院准教授

1）　本稿は，『国外理論動態』2024 年第 3 号に中国語で発表された論文「日本市民社会派馬克思主義的譜系及其理論溯源」を改稿の上，日本語訳したものであり，同誌の許可を得て掲載する。

2）　John Keane, Civil Society：Old Images, New Visions, Cambridge：Polity Press, 1998, p.13.

スト」（Associationist）へと転じた。市民社会論の中核的人物が離脱したことは，市民社会派マルクス主義という規範理論的性格の終焉を告げるものであった[3]。

渡辺雅男は，第二次世界大戦後の日本の市民社会論を三つの潮流に整理している。第一は，丸山眞男・大塚久雄・松下圭一らを含む日本近代化論者であり，彼らは近代啓蒙主義の立場から市民社会を論じた。第二はマルクス主義者であり，代表的人物として林直道と平田清明が挙げられる。第三は，一橋学派の社会学者であり，その起源は大塚金之助と高島善哉にまで遡ることができる[4]。しかし，この分類は，正統派の林直道を市民社会派の論者に位置づけ，平田清明を大塚久雄・丸山眞男と対立する側に置く一方で，内田義彦と望月清司が市民社会派の系譜において占める位置を見落とし，さらに平田清明の理論的貢献を過小評価するものでもある。

望月清司は，2009 年から 2010 年にかけて門下の村上俊介による連続インタビューを受けた際，市民社会派マルクス主義の系譜内部における世代間継承の問題について語っている。「講座派と市民社会論第一世代，さらにこの第一世代と内田義彦氏，その継承と切断の側面があるとして，内田先生と望月先生の世代では，継承関係は明らかなんですが，切断と言いますか，違いはあるのでしょうか。」と問われたとき，望月は「無理に違いをほじくらないでくれ。まして，「切断」においておや。」と答えている。望月清司は一方で，高島善哉・大河内一男ら第一世代の市民社会派と講座派とのあいだには，日本社会に存在する前近代的要素を近代啓蒙の立場から批判するという一貫した問題意識があったことを認めている。他方で，内田義彦ら「市民社会青年」の理論的構成は，頑強な講座派に対する「内部批判」であったとも述べている。

望月清司は，自身の市民社会論の構成が内田義彦の『資本論の世界』から影響を受けたことを認め，内田義彦による『資本論』の疎外論解釈を「見事と言うほかない」と評している。同時に，内田が社会的分業と交換という次元からアダム・スミス（Adam Smith）の市民社会論を独自に読み解いたにもかかわらず，『ドイツ・イデオロギー』における交通概念を見落とし，労働過程の疎外論を社会的交通の疎外論へと発展させることができなかった点を惜しみ，「「労働過程」をいくら掘ったって「市民社会論」にならない」と述べている[5]。内田義彦は，1966 年に初版が刊行された『資本論の世界』において，商品生産過程で労働者が従事する賃労働を二つの次元から読み解いた。すなわち，(1) 労働過程における合目的な精神労働と肉体労働が，生産手段を所有する資本家に従属すること，(2) 資本主義的私的所有のもとで，精神労働と肉体労働の生産物が資本家に帰属することである。内田義彦は，このような賃労働を「労働過程の疎外」と定義した。商品生産あるいは労働の過程だけでなく，労働者の生活過程，すなわち労働力商品の再生産過程もまた，資本の再生産過程に包摂されている。この再生産過程は，一方では商品としての物質的生産過程であり，他方では人間と自然との物質代謝過程（Stoffwechsel）でもある[6]。内田義彦による『資本論』のこうした理論的再構成は，青年マルクスと晩年のマルクスのあいだに横たわる溝を埋め，ル

3） 植村邦彦『市民社会とは何か―基本概念の系譜』平凡社，2010 年，250-260 頁参照。マルクスの『資本論』における協同組合工場に関する論述については，『マルクス＝エンゲルス文集』第 25 巻第 1 冊，大月書店，1966 年，561 頁参照。

4） 渡辺雅男「現代市民社会論の源流―高島善哉の『市民制社会』概念」『一橋社会科学』第 2 号，2007 年，155-189 頁参照。

5） 村上俊介「望月先生に聞く」『専修大学社会科学研究所月報』No.574，2011 年 4 月 20 日，1-59 頁参照。

6） 内田義彦『資本論の世界』岩波新書（B69），1995 年，87，102，188 頁参照。

イ・アルチュセール（Louis Althusser）が『マルクスのために』において提示した「認識論的切断」という解釈を批判することを意図していた。

中国国内の学界における日本市民社会派マルクス主義の紹介は，主として平田清明と望月清司に集中してきた。ある研究者は，この学派の理論的共通性を三点に整理している。第一に，市民社会と資本主義社会を区別し，前者を分業と交換の経済構造へと還元すること。第二に，市民社会を歴史貫通的な範疇として捉え，その否定的側面よりも積極的側面を重視すること。第三に，「共同体―市民社会―社会主義」という三段階説を採用し，市民社会を中心としてマルクスの社会形態論を再構成することである[7)]。

社会批判理論で知られるフランクフルト学派とは異なり，日本の市民社会学派における世代区分は必ずしも明確ではない。しかし，望月清司が述べているように，彼は専修大学で講座派の小林良正に師事し，平田清明は高島善哉に，高島善哉は福田徳三に師事した。こうした師弟関係に加え，本稿で論じる市民社会派の基本範疇および主張の共通性を踏まえるならば，スミス研究で知られる高島善哉・内田義彦，さらにマックス・ウェーバー（Max Weber）研究で知られる大塚久雄らを，戦後日本における第一世代の市民社会派学者と総称することができる。また，平田清明・望月清司・森田桐郎らを第二世代の学者と位置づけることができる。これまで，多くの日本の研究者は市民社会派マルクス主義の起源を論じる際，大塚久雄・内田義彦らが戦後に行った市民社会論構築の起源を，戦前の大塚金之助・山田盛太郎・平野義太郎らを代表とする講座派の問題意識に求め，前者と後者の理論構造を同一視する傾向を示してきた。たとえば植村邦彦は，内田義彦を直接「戦後の講座派マルクス主義者」と呼んでいる[8)]。しかし，このような理解は，内田義彦や平田清明らが市民社会派マルクス主義の系譜において示した独創的貢献を著しく覆い隠している。

以上を踏まえると，国内外の学界における日本市民社会派研究には，なお検討すべき問題が少なくない。第一に，第一世代の市民社会派が近代啓蒙の立場から前近代を批判するという問題意識を講座派から継承したことは否定できないとしても，戦後において第一世代の学者たちは市民社会論にどのような特別な意味を付与し，それによって講座派とは異なる一つの学派を形成しえたのか。第二に，第二世代の学者たちは第一世代のどのような見解を批判的に継承し，市民社会派の理論的構成をどのように発展させたのか。第三に，周知のように，マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』において非自発的分業に批判的態度をとり，それが資本主義的生産様式のもとでは労働者にとって疎外的で抑圧的な力となり，人間の個性の自由な発展を拘束すると考えた。また『ゴータ綱領批判』では，労働価値に基づく平等な商品交換の権利を「ブルジョア的権利」として斥けている[9)]。これは，私的所有のもとにおける労働力商品の等価交換の虚偽性を暴露するものであった。ところが，第一世代の市民社会派マルクス主義は，このような分業を美化し，分業・社会的交通・等価交換を研究の基礎範疇とした。この理論的構成は明らかに唯物史観を逸脱しているが，その理論的起源はどの思想家に由来するのか。以下，本稿はこれらの問題をめぐって論じる。

7） 韓立新「市民社会派馬克思主義及其対当今中国的意義」『日本学刊』2019年第2号，137-154頁参照。

8） 植村邦彦『市民社会とは何か―基本概念の系譜』平凡社，2010年，198頁参照。

9） 『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻，大月書店，1968年，20頁。

二，いわゆる「市民社会派マルクス主義」とは何か

日本で初めて市民社会派という名称を与えた学者は，高島善哉の門下生である佐藤金三郎であった。佐藤は，日本マルクス主義経済学界の研究状況を三つの大きな流派に整理した。「第一のいわゆる正統派というのは，マルクス経済学イコールマルクス主義経済学という立場で，理論と実践，科学とイデオロギー，理論と歴史との一致派です。それに対して第二の宇野派の場合には，マルクス主義経済学からマルクス経済学へという立場です。つまり，マルクス主義経済学から「主義」をとって，ただのマルクス経済学に「純化」する。したがって，理論と実践との分離，科学とイデオロギーとの分離，理論と歴史との分離という，一言でいえば分離主義の立場だということができると思います。第三の市民社会派というのは，前二者に比べれば，比較的最近あらわれてきたのですが，マルクス主義においてこれまで等閑視されてきた市民社会論を，マルクス主義の中に「復位」させようという試みだといっていいと思います。前二者，とくに正統派が生産関係重視の階級闘争史観だとすれば，市民社会派は生産力重視の分業史観です。」[10)]

佐藤金三郎はさらに，マルクス主義理論体系における唯物史観と経済学（剰余価値論）との関係をどのように理解するかを例に，三者の立場の相違を明らかにした。正統派は，唯物史観と経済学の関係を，前提と結果，一般的法則とその特殊的適用の関係として捉える。これに対して宇野派は，唯物史観が経済学研究の基礎を与えるのではなく，むしろ経済学研究によって社会主義的イデオロギーとしての唯物史観が基礎づけられ，マルクスが社会主義イデオロギーから科学的立場へと転換したことを論証したと考える。望月清司に代表される市民社会派は，正統派の唯物史観理解がエンゲルスの「教義体系」に由来すると見なし，それを「マルクス歴史理論」に置き換えようとした。すなわち，所有形態を基礎として展開されるエンゲルスの階級闘争史観とは異なり，マルクスが主張したのは社会的分業を基礎範疇とする市民社会史観であるとしたのである。正統派と宇野派は，このような市民社会形成史観を「マルクス主義の古典派への逆行であり，マルクスをアダム・スミスに還元させるもの」と批判した[11)]。また，市民社会派をマルクス主義理論の修正と見なし，実践面では構造改革派であり，議会制民主主義を擁護するものだとする見解もある[12)]。

（一） 宇野派と正統派

1960 年代に市民社会派が登場する以前，日本のマルクス主義学界には主として宇野派と正統派という二つの潮流が存在した。1920～1930 年代，講座派と労農派は，日本社会が資本主義社会であるかどうかをめぐって「日本資本主義論争」を展開した。その中核的論点は，日本資本主義の特質と発展段階をどのように理解するかであった。大塚金之助や山田盛太郎らを中心とする講座派は，日本資本主義社会にはなお濃厚な封建的性格が残存しており，第一の課題はブルジョア革命を遂行し，資本主義の全面的発展に政治的・法権的保障を与えることだと考えた。資本主義社会が十分に発展すれば，一方ではブルジョアジーの力が強まり，他方では社会革命の主体的勢力であるプロレタリアートが育成され，その段階でプロレタリアートが社会革命という歴史的任務を担うことになる。講座派がこの論争のなかで確立した「二段階革命論」に対し，山川均らを代表とする労農派は，日本

10） 佐藤金三郎「マルクス研究と現代」『経済セミナー』1975 年第 4 号（No.243），32 頁。

11） 同上，33 頁。

12） 萩原進「学派と入門文献」『経済セミナー』1975 年第 4 号（No.243），46 頁参照。

はすでに資本主義社会であり，改めてブルジョア革命を行う必要はなく，直接にプロレタリア革命を行うべきだと主張した。

この対立を止揚するために，宇野弘蔵は1936年に刊行した『経済政策論』において，資本主義の発展過程を重商主義・自由主義・帝国主義の三段階に分け，それぞれを資本主義の発生期・成長期・成熟期に対応させた。理論体系の構成から見れば，宇野は，マルクス経済学がその発展過程において三つの理論形態をもつと考えた。第一は，理論経済学によって資本主義の内部構造と労働運動を抽象的に分析する「原理論」であり，その代表的著作はマルクスの『資本論』である。第二は，資本主義の世界史を科学的に分析し，資本主義経済が19世紀の自由主義から20世紀の帝国主義へと転化したことを主張する「段階論」であり，その代表的著作はヒルファーディングの『金融資本論』および宇野弘蔵自身の『経済政策論』である。第三は，「原理論」と「段階論」を用いて日本資本主義の発展と農村経済の現状を分析する「現状分析論」であり，代表的著作として宇野弘蔵自身の『日本資本主義と農業』などが挙げられる。

正統派は，宇野派が方法論上マルクス経済学を「原理論」と「段階論」に分けることに反対し，両者は分離できないと考えた。また，科学としての経済学とプロレタリアートのイデオロギーとしての唯物史観を対立させることにも反対し，『資本論』は純粋な科学的著作であるだけでなく，同時にプロレタリアートのイデオロギーを代表する著作でもあるとした。正統派の代表的学者には宇佐美誠次郎･宇高基輔･島恭彦が挙げられ，代表的著作として，彼らが1966年に編集刊行した『マルクス経済学体系』（全三巻），および1972年から1976年にかけて編集刊行した『新マルクス経済学講座』（全六巻）がある[13)]。

13） 同上，46頁。

（二） 市民社会派成立の理論的背景

1960年代前後，西欧では「マルクス・ルネサンス」の思潮が現れた。この思潮は，二つのまったく異なる解釈経路を示した。ロジェ・ガロディ（Roger Garaudy）やジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre）らの実存主義者は青年マルクスの思想を重視し，「スターリン批判」の影響を受けつつ，ソ連の教科書体系を反省するなかで，『1844年経済学・哲学草稿』における疎外論を改めて読み解き，マルクス主義と人間主義を結びつけようとした。これに対して，アルチュセールら構造主義者は晩年のマルクスの立場に立って青年マルクスを否定し，青年マルクスはイデオロギー（哲学）的枠組みにおける人間主義に拘束されており，晩年になってようやく科学としての経済学研究へと転じたと考えた。この転換はマルクス思想における「認識論的切断」であり，したがって青年マルクスの理論はマルクス主義には属さないとされた。

日本の学界における「マルクス･ルネサンス」思潮の受容は，西欧とほぼ同時期に進んだ。そこでの二つの解釈は，青年マルクスの立場をとるものと，晩年のマルクスの立場をとるものに分かれた。佐藤金三郎によれば，「マルクス主義の人間主義」に賛同する学者は少なかったのに対し，アルチュセールの立場に賛同する学者は少なくなく，正統派・宇野派・廣松渉らがその例であった。また佐藤は，青年マルクスの人間主義または歴史主義を重視する立場と，晩年のマルクスの科学主義または構造主義を重視する立場とを，主観主義と客観主義の対立として捉え，それを一対の「アンチテーゼ」（Antithese）と呼んだ[14)]。この「アンチテーゼ」を調和するという歴史的使命を担って，市民社会派マルクス主義は登場したのである。

14） 佐藤金三郎「マルクス研究と現代」『経済セミナー』1975年第4号（No.243），38-39頁。

三，市民社会派の系譜

日本市民社会派マルクス主義は，なぜ二つの段階，二つの世代の論者に区分されるのか。第二世代は第一世代の理論をどのように継承し，発展させたのか。この問いに答えるため，本稿では第二世代の論者から出発し，遡行的に市民社会派理論の系譜とその形成史を考察する。

（一） 望月清司の市民社会史論

望月清司は1970年代の市民社会派を代表する論者であり，小林良正・雪山慶正・秦玄龍・平瀬巳之吉らに師事した。代表作『マルクス歴史理論の研究』において，彼は社会的分業を市民社会の基礎範疇とし，青年マルクスと晩年のマルクスを一貫したものとして読み解いた。しかし同時に，マルクスとエンゲルスの唯物史観には根本的相違があるとし，マルクスの歴史観は「分業展開史論」であり，エンゲルスの歴史観は「所有形態展開史論」または「階級展開史論」であると考えた。

望月清司によれば，エンゲルスは終始「分業＝私的所有」という立場を堅持した。すなわち，「分業とは所有，所有とは私的所有，私的所有とは階級支配，階級支配とは国家＝政治権力支配。」という見方である。そこから，エンゲルスは「性的分業→家族内自然発生的分業→家族内私的所有＝家族内潜在的奴隷制→家族間・社会的分業→階級支配→共産主義革命→私的所有と分業の廃止」という人類史の発展過程を構成した[15]。これに対し，マルクスの「分業展開史論」は，「分業それ自体の発展諸形態を追求する史論」である。望月によれば，生産力の発展はまず工業・商業労働を農耕労働から分離させ，それによって都市と農村の分離をもたらし，人類史を未開から文明へ，部族制から国家へ，地域的局限性から民族的独立・自決へと移行させる。これを概括すれば，「共同体的諸個人→内部交通→共同体間交換→所有諸形態→農工分業→大工業＝市民社会的分業→そして普遍的交通の完成＝諸個人の自由な連合（共産主義）」となる。この歴史理論は，「世界史＝人類史を貫徹する『共同体（Gemeinwesen）』洞察の基礎理論であると同時に，分明史＝市民社会史を貫通する『人間的ゲゼルシャフト』展望の基礎理論」でもある[16]。

さらに望月清司は，『経済学批判要綱』を根拠として，マルクスの歴史観を「本源的ゲマインシャフト→市民的ゲゼルシャフト→将来のゲマインシャフト」という三段階に整理し，市民社会に三重の規定を与えた。第一は，「生産と交通から直接に展開される社会的組織体」としての市民社会であり，それは「全歴史の真のかまど」である。第二は，「労働と所有の同一性」を基礎とする「小規模な自由所有者たちのゲゼルシャフト的交通」であり，これは近代市民社会の第一段階である。第三は，資本主義的生産様式に完全に支配された市民社会であり，それは共同体を解体し，「労働と所有の同一性」の原則を否定し，市民社会をブルジョア社会へと転化させ，人類史を疎外労働の世界へと導く。これは市民社会の第二段階である。市民社会において分業と交通が普遍化するにつれ，プロレタリアートは必然的に「ゲマインシャフト的労働とゲゼルシャフト的な所有の同一性」を要求するようになる。これこそ，未来共同体に不可欠な「自由人の連合」であり，望月清司はこれを「市民社会の復権」と呼んだ[17]。

このように望月清司は，社会的分業と普遍的交通を基礎範疇としてマルクスの唯物史観を再構成し，マルクスの未来共同体を「労働と所有の同一性」の原則に基づく市民社会の「復権」

15） 望月清司『マルクス歴史理論の研究』岩波書店，1974年第三刷，218，234頁。

16） 同上書，239，249，599-600頁。

17） 同上書，284，609，608，613，612，613頁。

として読み解いた。それによって，市民社会は人類史を貫く概念として構成されることになった。この「復権」に言及する際，望月清司は平田清明の「コンミューン主義」を引用し，また『マルクス歴史理論の研究』のあとがきにおいて，内田義彦による「方向指示」を強調している[18]。

（二） 平田清明の市民社会論

平田清明は1960年代後半の市民社会派を代表する論者である。1969年に刊行した『市民社会と社会主義』において，彼は一方で市民社会とブルジョア社会を区別し，市民社会における個体的私的所有を，ブルジョア社会形成以前の所有形態と位置づけた。そして，自身の労働に基づく個体的私的所有と，その上に成立する市民社会は「資本家社会への不断の転成の過程」にあると考えた。他方で彼は，「資本家社会から区別されたものとしての市民社会が，歴史的一段階をなすのではない。市民社会段階なるものがそれ自体として存在するわけではない。」とも述べている[19]。市民社会は，資本家社会へと不断に転成する過程のなかにのみ存在する。この自己解体の運動のなかで，商品・貨幣所有者は資本所有者へと転成し，個体的私的所有としての市民的所有権は資本所有権へと転成し，多数の市民による生産手段の私的所有は，少数の資本家による私的所有へと転成する。この転成は私的所有に「質的転換」をもたらし，自由で平等な私有者相互の関係は不平等な関係へと変わる。その結果，自由と平等はイデオロギーの次元にとどまる「仮象としての外形」となるのである[20]。

この基礎の上で，平田清明は『資本論』第一巻を，市民的生産様式が不断に資本主義的生産様式へと転成する過程を論じたテクストとして読み解いた。すなわち，マルクスは第一篇「商品・貨幣論」において市民的生産様式を論じ，第二篇「貨幣の資本への転化論」において市民的生産様式が資本主義的生産様式へと転化する過程を述べ，第三・四・五・六篇における剰余価値・労賃論などはこの転変の実体論であり，第七篇は資本家的蓄積様式と一般法則を明らかにするものだとした[21]。

日本の研究者は，中国語で「占有」と訳される「Aneignung」という語を「領有」と訳し，マルクスが『資本論』第一巻第七篇で述べた「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への変転」[22]を「領有法則の転回論」と呼んだ。言い換えれば，「商品生産と商品流通とにもとづく取得の法則または私有の法則は，この法則自身の，内的な，不可避的な弁証法によって，その正反対物に一変する」のである[23]。「商品生産の取得法則」とは，生産手段の所有権と生産者との統一，すなわち生産者が自らの労働に基づいて生産し，商品の所有権を領有する法則を意味する。この所有法則は，労働者が本来自己に帰属していた生産手段を喪失することによって，「資本主義的取得法則」へと転化する。平田清明は，マルクスのいう「商品生産の所有法則」を市民的生産様式と定義した。これこそが，市民社会が不断に資本家社会へと転成し，市民的生産様式が不断に資本主義的生産様式へと転成するという，彼の主張のテキスト上の根拠であった。

平田清明によれば，マルクスが論じた近代社会の形成には二つの過程が含まれている。第一は，古典古代の生産様式から近代市民的生産様式への転成であり，第二は，近代市民的生産様式から資本主義的生産様式への転成である。第

18） 同上書，613，616頁。
19） 平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店，1970年第四刷，52，53頁。
20） 同上書，59頁。
21） 同上書，60頁。
22） 『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻第2分冊，大月書店，1965年，754頁。
23） 『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻第2分冊，大月書店，1965年，760頁。

一の転成過程においては，共同体の解体と私的所有の形成に伴って個体的所有が発展する。第二の転成過程は，少数の大資本家が直接生産者である個体的所有者を収奪する過程であり，これによって個体的所有は形式化し，資本主義的取得法則が普遍化する。社会化された大生産と協業の発展につれて，資本主義的生産様式によって取って代わられた市民的生産様式は，それ自身の内在的弁証法を通じ，「否定の否定」という歴史過程を経て社会主義・共産主義社会を実現する。すなわち，近代社会の形成過程において形式化された個体的所有が再建されるのである。

このように平田清明は，マルクスの市民社会史理解を三段階に分けた。第一段階は古典古代の市民社会であり，たとえばローマ共同体などにおける奴隷制的商品経済と，その基礎の上に形成された私的所有の市民社会である。共同体の解体とともに古典古代の生産様式から近代的生産様式への転成が進み，第二段階として純粋な市民社会が形成される。それは，分業と財産を基礎範疇とし，市民が自由で平等な法的主体として相互に交通する社会であり，また私有者が対等な財産権者として，自己の保有する財産を商品として相互に交換することによって形成される社会である。平田清明は，この生産・交換・消費関係のなかにある個人の自己獲得，すなわち個人による財産の獲得を，マルクスのいう「個体的所有」と解釈した。そして現実には，生産・交換・消費の各局面がいずれも排他的私的所有であり，生産手段と生活手段はいずれも私人に所有されると考えた。第三段階は，個体的所有を再建した社会主義国家である。その核心は市民的権利と法権体系であり，社会的分業がこの所有に公共的保障を与えるため，平田はこれを「市民的国家」と呼んだ。第二段階における，不断に資本家社会へと転成する市民社会と，第三段階の「社会主義的市民社会」とのあいだには質的転換がある。前者の所有形態は個体的私的所有であるが，後者こそが真の個体的所有，すなわち社会的所有なのである。

平田清明は,「分業＝所有, 生産＝交通様式」を市民社会の基礎範疇とし, マルクスがこれら市民社会の基礎範疇を批判的に継承したうえで創出した唯物史観とは, 私的所有によって汚れた市民的日常感覚を批判することによって「人間を人間として再建する」試みにほかならないと考えた[24]。このようにして平田清明において, 市民社会は歴史を貫く社会過程となり, 社会主義社会は個体的所有を再建する歴史的使命を担う, 市民社会のより高次の段階となったのである。

（三） 内田義彦の市民社会論

1925 年，日本では共産主義思想の取締りを目的とする治安維持法が公布された。1930 年代から第二次世界大戦終結まで，日本でマルクス主義研究を行うことは次第に困難となり，高島善哉や大河内一男のような多くの研究者は，スミスら古典経済学者の研究へと向かった。彼らは，スミスが政治経済学の観点においてマルクスにより近いと考えつつも，マルクスの批判を通じてスミスを読み解くことを極力避け,「借り物のマルクスからではなく，わかったスミスから出発してマルクスをもう一度読んでみる」ことを試みた[25]。高島善哉は, 1941 年刊行の『経済社会学の根本問題―経済社会学者としてのスミスとリスト』において，スミスのいう市民社会とは自由で平等な市民から成る社会であり，それらの市民は「絶対王制的なるものを排撃しなければならない歴史的必然から，国家そのものを否定し，或いは社会の全体的基底を否認するところの，純抽象的な個人主義的社会観が成立した」と考えた[26]。こうした見方の影響を受

24） 平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店, 1970 年第四刷，175 頁。

25） 『内田義彦著作集』第 3 巻, 岩波書店, 1988 年, 398 頁。

26） 『高島善哉著作集』第 2 巻，こぶし書房,

けて，内田義彦はスミスの市民社会研究に取り組み，1953 年に『経済学の生誕』を刊行した。彼は同書の序文で，スミスを研究する理由を次のように述べている。「この本でぼくは，主としてスミスを中心にしながら，イギリスに特有な，あるいは特殊イギリス的ともいうべき歴史の科学としての古典経済学の意義と限界とを，それを生みだした歴史的地盤――すなわち，イギリスにおける産業革命の進行と，それを「古典的」という言葉でよばれるくらい，徹底的におしすすめてゆく主体となったブルジョア・ラディカリズムの性格と関連させながら，とりあつかおうとおもう。」[27] 内田義彦にとって，スミスは近代経済学の真の創設者であるだけでなく，「市民社会の創設者」でもあった[28]。

内田義彦は同書で，『国富論』における市民社会概念を分析し，スミスが文明社会としての市民社会を二つの次元から説明していると考えた。一方では，労働生産物の不平等あるいは不公正な分配により，市民社会の内部に貧富と階級の差異が生じる。他方では，分業による生産力の発展によって，市民社会の内部には社会全体に及ぶ普遍的豊かさが生じ，「すべての文明社会において，最下層の人民にも及ぶ普遍的富裕を引き起こす」ことになる[29]。内田義彦は，スミスの理論においては，文明社会に存在する階級的搾取が多数の民衆を一般的な貧困に陥れる一方で，生産力のすばらしい発展により普遍的豊かさも実現されるという，相反する二つの次元が同時に存続していると指摘した[30]。さらにスミスにおいて，生産的労働を担う賃金労働者は，労働力商品の所有者として二重の意味で自由である。一方では自らの労働力を自由に売ることができ，他方ではいかなる生産手段も占有していないために，生産手段から解放されており，生産手段の所有者に自らの労働力を売って生活手段を得るほかない。マルクスもまた二重の意味での自由な労働者について論じたが，彼はとりわけ第二の意味での自由を批判し，労働者は自らの労働力以外には売るべき商品をもたず，「すべての物から自由」であると指摘した[31]。内田義彦によれば，マルクスと異なり，スミスは第一の自由，すなわち自由な人として自分の労働力を商品として処分し，他の階級と平等な権利を享受する点をより重視した。階級社会の発展史においてこれを実現しえたのは資本主義社会だけであった。この意味で，資本主義社会は，法権上の平等な立法権を享有し，財産あるいは商品を自由に売ることのできる自由な市民によって構成される社会である。階級支配と貧富の差，そして法治・道徳・普遍的豊かさは，私的所有制度の両極であり，資本主義発展の自然な過程でもある。いずれも，その「究極の到達点たる自由な市民社会をめざしておこなわれる」ことである[32]。

このことから，内田義彦は『日本資本主義の思想像』において，スミスの市民社会を二つの概念装置に分けた。すなわち，抽象的概念としての市民社会（法治・道徳・普遍的豊かさなどの理念）と，実体概念として純粋な資本主義の市民社会である。内田はこれによって日本資本主義の発展過程を分析し，日本の資本主義は「資本主義社会ではあるけれども，まだ市民社会ではない」と結論づけた[33]。また，市民社会の主

1998 年，175 頁。

27） 内田義彦『新版 経済学の生誕』未来社，1994 年，18-19 頁。

28） 同上書，22 頁。

29） A. Smith［1978］, Lectures on Jurisprudence, ed. by R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein, in : *Glasgow Edition of the Works and Correspondence of A. Smith*, vol.V, Oxford., P.566.

30） 内田義彦『新版 経済学の生誕』未来社，1994 年，182-184 頁。

31） 『マルクス＝エンゲルス全集』第 23 巻第 1 分冊，大月書店，1965 年，221 頁。

32） 内田義彦『新版 経済学の生誕』未来社，1994 年，187 頁。

33） 内田義彦『日本資本主義の思想像』岩波書店，

体としての「ホモ・エコノミクス」をどのように理解するか，さらに資本主義倫理と資本主義経済との関係をどのように理解するかについて，内田義彦は「アダム・スミス問題」は擬似問題であると断定した。すなわち，共感を人間性の基礎とする『道徳感情論』と，利己心を人間性の基礎とする『国富論』とのあいだには顕著な差異は存在しない。なぜならスミスは利己心を否定していないが，同時に人間は道徳と法治の制約のもとで自己利益を追求すると考えていたからである。つまり，商品所有者＝ホモ・エコノミクスは倫理的次元をも併せ持っている。この意味で，資本主義社会では「経済的世界は同時に道徳的世界」でもある[34]。内田義彦によれば，合理的経済人を主体とする資本主義的市民社会は，特権・独占・人的コネクションを原理とする封建的な「上流社会」を止揚し，「一物一価」と公正な交換法則によって支配される産業社会を構築した。この基礎の上で，内田義彦はさらに，日本がホモ・エコノミクスをよりどころとして市民社会を構築するという志向と展望を表明したのである[35]。

（四） 高島善哉の市民社会論

高島善哉は当初，福田徳三に師事したが，福田がソ連へ講演に赴いたため，日本初期のマルクス主義経済学者であり講座派の代表的人物であった大塚金之助の門下に移った。大塚金之助の影響を受け，高島善哉は限界効用論などの主観的経済学ではなく，社会化された経済学理論を考察対象とし，スミス，アダム・ファーガソン（Adam Ferguson），フリードリヒ・リスト（Friedrich List）らの市民社会論研究を開始した。同時に，一橋大学で 45 年間学び，また勤務した高島善哉は，戦後日本の経済学界に多くの優れた研究者を育てた。たとえば，スミスあるいはマルクスの市民社会論研究で知られる水田洋，古賀英三郎，平田清明，佐藤金三郎らである。前述のように，植村邦彦や渡辺雅男など古賀英三郎の弟子たちは，日本市民社会派マルクス主義の起源を，1940 年代における高島善哉のスミス市民社会論研究に求める傾向を示している。

1941 年刊行の『経済社会学の根本問題――経済社会学者としてのスミスとリスト』において，高島善哉はスミスとリストの市民社会論を詳細に論じ，市民社会を「何よりまず人間の経済関係，特に十七，十八世紀の頃，中世的束縛から経済的政治的文化的に解放されて生成し来たったところの近代社会関係」と概括した[36]。すなわち，高島善哉は主として経済的側面から市民社会を解釈し，それを近代的経済関係，たとえばスミスの「商業社会」あるいはファーガソンの「商業国家」へと還元した。しかし他方で，彼は近代経済社会を基礎として派生する政治的理念，すなわち「第三階級の成立をまってはじめて可能となった生活関係」をも見落とさなかった。そして，「政治的には自由と平等と博愛の精神，経済的には等価と正義の思想は，正にこのような生活関係の枢軸をなしている。アダム・スミスが市民社会といい，商業社会といったとき，彼が見ていたものは即ちこれに外ならなかったのである」と述べている[37]。

市民社会と資本主義社会との関係について，高島善哉は次のように述べている。「スミスの商業的社会というのはこの場合そのままに資本主義社会を意味しているといってもよい。勿論市民社会がそのままに資本主義社会であることはできないので，スミスがこの二つのものを明瞭に区別しなかったことから，価値論における

1970 年第四刷，100 頁。

34） 内田義彦『新版 経済学の生誕』未来社，1994 年，191，193 頁。

35） 『内田義彦著作集』第 5 巻，岩波書店，1988 年，214-215 頁，301 頁。

36） 『高島善哉著作集』第 2 巻，こぶし書房，1998 年，122-123 頁。

37） 同上書，126-127 頁。

混乱を招いたことは人のよく知るところである。しかし歴史的概念としての市民社会が資本主義社会の概念においてその完成を見ることは明白であって，スミスはこの完成化の過程を十分論理的に把握しなかったとはいえ，市民社会の実質として資本主義的生産の諸相を看取したことは彼の卓越した眼識を示すものである。それであるからスミスにおける市民社会は，これを経済的側面から眺めたとき，第一に歴史的発展的概念であり，第二に生産力の体系であると断ずることができるであろう」[38] 植村によれば，高島善哉は一方で，市民社会を資本主義社会以前の歴史段階，すなわちその概念の不完全な形態と見なし，他方で資本主義社会の生産関係を捨象した「生産力の体系」に帰着させ，封建社会に対する市民社会の歴史的に進歩的な側面を強調した[39]。

スミスと異なり，高島善哉は資本主義社会を市民社会と同一視せず，前者を後者の一つの歴史段階と見なした。言い換えれば，市民社会概念の完成には資本主義的生産力の発展が必要であり，後者の終点として，市民社会概念それ自体が，その歴史的発展過程において完全に現れるということである。それでは，市民社会概念の完全な実現をどのように理解すべきなのか。高島善哉は，「等価とは経済的給付と反対給付の同等を意味するものであって，それはいわゆる経済における正義の実現である。或いはより正しくいえば，流通における正義の実現であって，それらはさらに諸経済主体の等価を前提している」と指摘した[40]。ここから彼は，市民社会と資本主義社会を区別し，市民社会を，一方では資本主義社会以前の歴史段階および資本主義社会それ自体として，他方では資本主義社会の最終的帰趨として，経済領域では「等価と正義の思想」を，政治領域では「自由と平等と博愛の精神」を実現する観念的社会として捉えたのである。

スミスの商業社会を媒介として，高島善哉は市民社会にこうした規範的理念を付与し，それを観念論的意味における規範理論的性格として構成し，現実の資本主義社会を批判するために用いた。彼は晩年，こうした規範的理念を備えた観念論な的意味での市民社会を「市民制社会」と呼び，市民社会の一歴史段階としての資本主義社会から区別した。そして，「「市民制社会」は理念ですから，現状を認識し，現状を批判するための一つの学問的なトゥールでございます」と明言している[41]。これは明らかにスミス自身の市民社会論を超え出るものであった。高島善哉は晩年のインタビューで，「日本には市民社会がない，だから市民社会を創り出さなければならない」という「市民社会派」の核心思想が大塚金之助から継承されたものであり，それこそが彼をスミス市民社会論研究へと向かわせた直接の動機であったと率直に語っている[42]。

四，市民社会派の理論的起源

市民社会派の理論的構成は，いかなる意味で唯物史観を逸脱しているのか。その理論的起源はどの思想家に由来するのか。いかなる理論的特質が市民社会派を講座派から区別するのか。第二世代の市民社会派は第一世代のどの見解を批判的に継承し，市民社会派の理論的構成をどのように発展させたのか。本稿は，これまで整理してきた市民社会派の理論的系譜に基づき，以下，これらの問いに回答を試みる。

38） 同上書，129 頁。

39） 植村邦彦『市民社会とは何か―基本概念の系譜』平凡社，2010 年，186 頁。

40） 『高島善哉著作集』第 2 巻，こぶし書房，1998 年，192 頁。

41） 高島善哉「大塚金之助と一橋の学問」『橋問叢書』第 52 号，1986 年。

42） 高島善哉『人間・風土と社会科学―私の人生論ノート』秋山書房，1985 年，215 頁。

（一） スミスとマルクス

まず，なぜ市民社会派マルクス主義は「古典への逆行」とされるのか。それはどの段階で，またどのように「マルクスをスミスに還元させる」のか。前述のように，市民社会派マルクス主義の第一世代にあたる高島善哉と内田義彦は，スミスの市民社会論を手がかりとして，市民社会派の規範理論的性格を共同で確立した。これ以後，「日本は資本主義社会ではあるけれども，まだ市民社会ではない」という問題意識が，市民社会派に共有されるようになった。

第二世代の学者である平田清明は，マルクスの歴史理論を「市民社会史論」として解釈し，古典古代の市民社会，個体的私的所有を基礎とする資本家的市民社会，そして社会主義的市民社会を区別した。また「個体的所有の再建」を出発点として，個体的私的所有としての市民的所有権と，真の「個体的＝社会的所有」とを区別し，後者を実現した社会主義国家を「市民的国家」，すなわち内田義彦がいう「自由な市民社会」と呼んだ。平田清明はスミスへの敬意を少しも隠していない。「個体的労働と個体的所有の開花として市民社会を展望する理論的視角を最初に提供したのは，市民社会の経済学的分析をはじめてこころみた一八世紀のアダム・スミスであった。未来は人類の古典おいて，すでに垣間みられていたのである。未来の現実的開拓は，古典の新たな再建をよびおこさずにはいないのであろう。」[43] このように見れば，平田清明におけるマルクスの個体的所有の再建の終点はスミスであり，マルクスをスミスへ還元するという問題意識は内田義彦に由来する。内田義彦は『日本資本主義の思想像』の「あとがき」で，自身の研究体系について次のように述べている。「私は，マルクスについて，スミスについて，さらにはスミスとマルクスとの噛み合わせ方について，根本的に研究し直さねばならぬと考えるにいたった。その問題意識を一口で言えば，スミスが**提起している**市民社会の問題を**すり**抜けてもいけないし，スミスを**野放し**にしておくこともいけないということである。」[44] ここから分かるように，内田義彦はスミス市民社会論の否定的な側面，すなわちブルジョア社会における貧富の差や階級支配などの問題を認識していた。しかし，その否定的な側面よりも，彼の研究が重視したのは市民社会を馴致することであり，市民社会の積極的な側面を抽象し，それを科学的社会主義と対話させることであった。平田清明は最終的に『市民社会と社会主義』において，内田が提示したこの問題意識を完成させ，「社会主義的市民社会」という理論形態によって「古典の新たな再建」を実現した。同様に，望月清司の市民社会論も，この問題意識の延長線上に位置づけることができる。その基礎範疇である社会的分業，普遍的交通，「市民社会の復権」などに表れる市民像への憧憬は，唯物史観から得られたというより，むしろスミスに由来するものなのである。

（二） 講座派と市民社会派

1922 年，山川均は『前衛』誌上に「無産階級運動の方向転換」を発表し，それまでの日本の社会主義運動は少数の知識人エリートに限定され，思想的には徹底的に純化されていたが，それは無産階級の大衆から「離れてくる」思想であり，「虚無主義者の理想」という誤謬に陥っていたと論じた。山川によれば，無産階級の大衆を社会主義革命へ導くためには，社会主義理論を思想的に純化する必要がある。しかしそれはプロレタリア革命の第一歩にすぎず，過去 20 年間の日本思想界が行ってきた「準備の第

43） 平田清明『市民社会と社会主義』岩波書店，1969 年，125 頁。

44） 『内田義彦著作集』第 5 巻，岩波書店，1988 年，300 頁。太字による強調は原文からのものである。

一歩」にとどまる。そこにとどまり，第二歩を知らず，思想的に徹底し純化した革命主義者となってはならない。日本のプロレタリア運動はこの誤りを自覚し，「方向転換」を行うべきである。すなわち，階級意識に目覚めた少数の先覚者に限定されるのではなく，思想的に徹底的に純化された社会主義理論を無産階級の大衆と結びつけ，大衆をプロレタリア革命運動へ導かなければならない。そこで山川均は「大衆の中へ！」というスローガンを掲げ，これこそが無産階級革命の第二歩であると主張した。大衆と結びついてはじめて，「革命の思想」は「革命の運動」へと転化しうるのである[45)]。この主張は後に労農派マルクス主義の核心思想となり，初期日本共産党の指導方針ともなった。

山川主義に対して，福本和夫は「分離―再結合」の思想を提起し，これは「福本主義」と呼ばれた。1924 年に発表した「経済学批判のうちに於けるマルクス『資本論』の範囲を論ず」において，福本和夫は福田徳三・高畠素之・河上肇らの唯物史観理解を「俗流な公式主義」と批判した。さらに 1925 年 10 月には『マルクス主義』誌上に「『方向転換』はいかなる諸過程をとるか，我々はいまそれのいかなる過程を過程しつゝあるか―無産者結合に関するマルクス的原理―」を発表し，先覚者と無産階級の大衆は，結合の前にまずきれいに分離しなければならないと主張した。革命運動は「精神上の闘争」にとどまらず，政治・戦術の面にまで拡張されるべきである。第一歩として，マルクスの諸要素を「分離」して結晶化する作業が必要であり，そのためには闘争の範囲を理論面に限定し，方法論（弁証法），革命理論（理論と実践の統一），階級理論，組織過程論，ならびに資本主義の現実運動の考察において全面的な理論闘争を展開しなければならない。第二歩として，前衛組織を，さらに発展・拡大したプロレタリアートおよび労農大衆と結合させる。これが「結合のための分離」である。福本は，日共の「二段階革命論」に反対した山川均を粗俗な経験主義者・折衷主義者と批判し，彼が認識論および方法論において根本的な誤りを犯し，目的意識的にプロレタリアートを革命へ導く指導権を放棄した，革命理論上の日和見主義であるとした。

その後，福本主義は 1926 年に日本共産党が再建された後の指導思想となったが，1927 年にコミンテルンが「日本問題に関する決議」（いわゆる「1927 年綱領」）を採択するまでのことであった。この決議により，山川主義と福本主義はいずれも批判された。同決議は，日本資本主義にはなお封建的要素が残存しており，当面の任務はブルジョア革命であるとした。1932 年，コミンテルンは「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」（いわゆる「1932 年綱領」）を採択し，日本を絶対主義的天皇制，封建的土地所有，独占資本主義から成る政治経済体制と正式に規定した。そして，当面の日本革命の任務は絶対主義的天皇制の打倒を目指すブルジョア民主主義革命であり，プロレタリア革命は次の段階の歴史的任務であるとして，改めて「二段階革命論」を確認した。「1932 年綱領」の提示は，講座派の学者たちが『日本資本主義発達史講座』を執筆するうえで強力な支えとなった。同書は 1932 年から 1933 年にかけて全七巻が順次刊行され，労農派と講座派のあいだに資本主義の性格をめぐる論争を引き起こした。

前述のように，多くの日本の研究者は市民社会派マルクス主義の起源を戦前の講座派の問題意識に求め，両者を同一視する傾向を示している。しかし筆者は，講座派の多くは近代啓蒙主義の立場に立ち，明治維新をブルジョア的革命としては不徹底なものと見なし，日本社会における封建的残滓を批判したと考える。たとえば服部之総は，明治維新は純粋なブルジョア的革命ではなく，外圧に迫られて皇権の主導のもと

45） 山川均「無産階級運動の方向転換」『前衛』（7・8 月合併号），1922 年。

上から行われた革命であり，土地所有制などの面においてなお封建的要素が残存していると考えた[46]。これに対し，市民社会派マルクス主義が一つの独自の流派たりえたのは，その問題意識が，封建的絶対主義の色彩を帯びた政商資本主義をブルジョア合理主義の立場から批判することにとどまらなかったからである。講座派と異なり，市民社会派は資本主義社会の否定的側面を認識し，スミスとマルクスを接合し，ブルジョア社会と市民社会を区別し，観念論的意味における市民社会を再建して，日本のブルジョア社会を批判した。「古典の新たな再建」こそ，市民社会派を講座派から区別する理論的特質である。

（三） 市民社会派内部の世代間差異

市民社会派マルクス主義の発展史を考察する際には，その内部における世代間差異も看過できない。望月清司は晩年，内田義彦が『資本論の世界』で展開した「労働過程の疎外」論を批判した。望月清司によれば，個体が生産した商品は自ら消費されるのではなく，共同体へ「譲渡」され，他の構成員の生産物と交換される。「譲渡」にあたるドイツ語は「Entäußerung」であり，外へ出す過程，すなわち「外化」と同義である。外化しなければ回収することはできない。これがマルクスの『ミル評注』における疎外の円環である。しかし，労働過程における疎外に関していえば，外化された自己のエネルギーの成果は，自己によって消費されれば疎外が止揚されてしまうため，「ロビンソンみたいに。どこへもひろがって行けない袋小路だ。」[47] 社会的分業へつなげてゆくかたちで「望月清司市民社会論」を創出したのかと問われると，望月清司は次のように答えた。「そういうわけ。理念としては，社会からまったく独立した個体はいないんだから，暗黙のうちに『共同体・内・外化→そして取り戻し』を考えるんだが，それを労働過程疎外と社会的交通疎外とに区別したうえで両者を連結させる。両者は切り離そうったって切り離せないんだ。社会的交通疎外そのものが労働過程疎外を含まなければ，そもそも循環はしないのだから。」[48] 望月清司が社会的交通の疎外によって労働過程の疎外を統合しようとした見解は，内田の市民社会論を超え出るものであった。

このようなマルクス疎外論の解釈は，明らかに廣松渉の理論から思想的資源を汲み取っている。1969 年に刊行された『マルクス主義の地平』において，廣松渉は 1960 年代の国際マルクス主義学界内部の論争，すなわちサルトルを中心とする実存主義とアルチュセールを中心とする構造主義との対立を，「人間主義対科学主義の対立」として整理した。彼はそこで次のように問いかける。「しかし，人間主義と科学主義とは，近代イデオロギー――資本主義時代に照応するイデオロギーという語の精確な意味での「ブルジョア・イデオロギー」――の両極形態ではないのか？　人間主義も科学主義も，従って両者の対立も，古代や中世には決して存立しえなかった。この対立は，近代イデオロギーの大前提を俟ってはじめて成立しうるもの」である[49]。つまり，廣松渉は人間主義と科学主義を近代イデオロギーの両極，あるいは両者の対立を資本主義内部で生じた論争として捉えたのである。これに対して，実践面でブルジョア社会を止揚しようとするマルクス主義理論は，近代ブルジョア・イデオロギーを全面的に超え，新

46） 沖浦和光「日本マルクス主義の思想方法の一特質―福本イズムの思想的意義をめぐって―」『沖浦和光著作集 第二巻 近代日本の文化変動と社会運動』現代書房，2017 年，312-387 頁参照。

47） 村上俊介「望月先生に聞く」『専修大学社会科学研究所月報』No.574，2011 年 4 月 20 日，26 頁。

48） 同上，26 頁。

49） 廣松渉『マルクス主義の地平』講談社学術文庫，1991 年，69 頁。

たな理論的地平を切り開く。この意味で，人間主義と科学主義はブルジョア・イデオロギーの両極であり，いずれも近代の理論的地平を超えていない。この対立を止揚するために，廣松渉は「物象化論」を提起した。彼によれば，青年マルクスは『経済学・哲学草稿』において主観―客観関係という近代哲学の規範性に拘束され，自己疎外における個人を「非本来的な存在」として捉えていた。しかし，マルクスが「フォイエルバッハに関するテーゼ」において「社会的諸関係の総体」を発見して以後，「疎外の論理から物象化の論理への推転」は完了し，フォイエルバッハ的自己疎外の主体は共同主観的な協働関係[50]の主体へ，孤立した個体は「世界･内･存在」と「歴史・内・存在」へと転化し，近代思想の地平を超えることになった。廣松渉は，近代思想の境地を超えた後，マルクスが『経済学批判要綱』で批判した対象は，もはや主客関係における自己疎外ではなく，商品交換社会において主体と主体とのあいだに形成される物象化された社会関係，すなわち商品・貨幣・資本などの物象を媒介とする社会関係であると主張した。したがってマルクスは，『資本論』で資本主義的再生産様式を批判するために用いられる物象化論は，『経済学批判』の時点で，ほぼ完成されていたのである[51]。

望月清司が内田義彦の「労働過程の疎外」論を批判する際に用いた基礎範疇である「共同体･内･個人」[52]，および「共同体･内･外化→回収」という公式[53]は，まさに廣松渉が構築した，主体と主体とのあいだに形成される物象化された社会関係という思想から汲み取られたものであった。これが，望月清司が『マルクスの歴史理論』の「あとがき」で廣松渉に謝意を示した理由でもある。

五，結語

以上のように，本稿は，市民社会派マルクス主義の第一世代にあたる高島善哉と内田義彦，第二世代にあたる平田清明と望月清司の理論的構成を例として，その成立の時代的背景，世代間継承，理論的起源を明らかにしようとした。高島善哉と内田義彦は，スミスの市民社会論を媒介として市民社会派の規範理論的性格を確立した。すなわち，経済領域における「等価と正義の思想」と，政治領域における「自由と平等と博愛の精神」によって，市民社会を観念論的な意味における近代文明社会として構成したのである。平田清明はさらに，マルクスの理論を用いて，市民社会に商品生産の所有法則と個体的所有の再建などの含意を付け加え，市民社会と社会主義との対話を完成させた。望月清司は先行世代の論者の基礎の上に，廣松渉の物象化論を取り込み，「市民社会の復権」というスローガンを提示した。「古典の新たな再建」は，市民社会派を講座派から区別する理論的特質である。市民社会派の理論的構成はスミスとマルクスを接合させ，スミスから近代文明社会の理念を汲み取り，さらにマルクスの個体的所有の再建などの思想と結びつけることで，市民社会を「生産力の体系」へと還元させた。しかしこの試みは，市民社会が階級社会として内包する支配と被支配の二重構造を捨象し，経済領域では私的所有社会における生産関係と生産力の矛盾を捨象するものであった。そのため渡辺憲正から，「政治的支配構造を水平化し，経済的階級

50）「共同主観的な協働関係」は廣松渉が創出した術語であり，「間主観性」に近く，「主体間性」と呼ばれることもある。

51）廣松渉『マルクス主義の地平』講談社学術文庫，1991 年，302，312，307 頁。

52）これは望月清司の用語であり，「共同体内部の個人」または「共同体内部の外化→回収」を意味する。

53）村上俊介「望月先生に聞く」『専修大学社会科学研究所月報』No.574，2011 年 4 月 20 日，32 頁参照。

構造を平板化する」と批判されたのである[54)]。

市民社会の現代的形態は，今日の日本においては市民団体へと変容している。たとえば，ある共通のミッション志向を達成するために組織された非政府組織（NGO）や非営利組織（NPO）がそれである[55)]。このような市民団体は，人間の再生産を担う組織としての経済的次元と政治的次元を失っており，市民社会派も日本の学界においてはすでにかつての影響力を失っている。かつて日本の近・現代化過程を推進した一つの理論形態として，市民社会派にはスミス市民社会論の過剰解釈といった問題が存在するのかどうか。この点については，別稿において改めて検討したい。

（2026 年 7 月 6 日受理）

The Genealogy of Japanese Civil Society Marxism and Its Theoretical Origins

Abstract

This article examines the historical background, intergenerational transmission, and theoretical sources of the Japanese civil-society school of Marxism. Focusing on the first generation, represented by Takashima Zenya and Uchida Yoshihiko, and the second generation, represented by Hirata Kiyoaki and Mochizuki Seiji, it clarifies how this school attempted to restore the concept of civil society within Marxist theory. Takashima and Uchida drew on Adam Smith to define civil society as a modern civilized society grounded in freedom, equality, fraternity, equivalent exchange, fairness, and justice. Hirata connected this framework to Marx's idea of the reconstruction of individual property and sought to place civil society in dialogue with socialism. Mochizuki further developed the theory through social division of labor and universal intercourse. The article argues that the school's defining feature was a "new reconstruction of the classics," while also noting its tendency to abstract from class domination and the contradictions between relations and forces of production in private-property society.

54） 渡辺憲正「戦後日本における市民社会論」『関東学院大学経済経営研究所年報』2007 年（No.39），26-41 頁参照。

55） 勝村務『マルクス経済学の論点―岐路に立つ世界を読むために』社会評論社，2023 年を参照。